

二四二 猿橋伝馬騒動発端の願書 文久二(一八六二)年

乍恐以書付御下奉願上候

当御領所甲州道中猿橋宿問屋兵右衛門と同宿年寄東五郎、同半左衛門、百姓代七郎左衛門右三人と相掛り奉訴上候は、年々正月十七日小前一同役席へ打寄御伝馬勤方一式及相談候実例にて、当戊年之儀も宿方一統え寄会触いたし候処、前書東五郎外式人之もの共義、同日七郎左衛門宅え小前之内七八人程呼寄及内評、宿方惣小前被相頼候趣を以右東五郎、半左衛門、七郎左郎左衛門義罷越、去酉年御伝馬勤金差引銭之分割賦受度旨申之。右は御伝馬割賦等之儀役人共手許において可引持義ニ無之処、右え事寄小前之ものとも呼集種々不穩相談いたし候趣、殊ニ繰七八人之申口を以一宿小前惣代の申分難心得ニ付右始末及掛候処、東五郎義種々不法之儀申罵、役席を立退、半左衛門、七郎左衛門義も同様立帰、更ニ相談向決着不仕、右は全東五郎外式人義差含有之、惣小前被相頼候旨申出候得共、全偽之儀にて且又役席において不法申罵候而已不成、宿方定例之評義妨いたし為差支候難捨置、第一右体仕候趣意は、当宿御伝馬勤方之儀難決之次第も有之趣にて善右衛門外七人之もの共百姓代七郎左衛門方え申出候は、当正月十七日定例初寄会当日差掛り候義ニ付不取敢東五郎外式人次ニ問屋兵右衛門え及談候義ニ付、別席相立役前を軽蔑等いたし候義ニハ決て無之候得共、宿内一体惣代頼有無疑と不突留申出候放行違も出来御手敷奉掛候仕義ニ至候段奉恐入、右之通相分候上は此上兵右衛門においても御願筋毛頭無御座、且御伝馬勤方之義ハ難儀ニ不相成様村役人共一同心添諸事深切ニ取斗御伝馬勤兼候もの差出候御伝馬金去酉年分早々割賦可致は勿論、枝郷小倉幡野両所ハ問屋え定請人足之儀は、先規宿定之通取斗候答にて双方無申分内済相整候間、何卒以御慈悲内済之趣御聞濟御調御免御下被成下置度、一同連印此段奉願上候。

以上

当御領所

甲州道中

猿橋宿

問屋

願人 兵右衛門

与頭

惣左衛門

問宿

百姓代

相手 七郎左衛門

年寄

〃 東五郎

〃 〃

〃 半左衛門

郷宿

久右衛門

相手

竹次郎

谷村

御役所

二四二 知見芳文家文書五九(猿橋町幡野)

ここにかけた史料は、幕末の伝馬に關する争いの中で、大月市地域内で、最も大規模、且つ長期間争われた猿橋宿及び枝郷のものである。これは事件の発端で、まだなにかがあらそわれているか、全貌はあらわれず、ただ伝馬勤金差引銭割賦の問題だけが表面に出ている。その後の経過と結末については、本書の第二五八号及び第二五九号の文書を参照されたい。伝馬・助郷問題は、一方で幕府に対する広汎な反対闘争の展開、他方で、宿内の問屋やそれと方々りまく旧体制に対する村方騒動(助郷村もふくめて)の頻発という形で進展・激化する。大月市地域でもその事例はきわめて多い。幕末の諸矛盾が最も端的にこの問題にあらわれるのである。

乍恐以書付御下奉願上候

当御下猿橋村年寄小前式拾四人惣代年寄東五郎外右人、并枝郷小倉幡野兩組年寄小前四拾九人、同村名主兵右衛門外式人、と相懸不正出入、去ル文久二戌六月中内海多次郎様御役所へ奉出訴候一件、追々引続御吟味奉請罷在候処、今般内済仕候趣意左ニ奉申上候。

一、訴訟方にて申立候は、当村之儀御高式百四十六石余、宿並家數九七拾軒余、其外枝郷小倉幡野共一手差配地宿兼帯之村方ニ有之、然ル処相手兵右衛門儀去ル天保四巳年入役いたし、同人勤役以来地宿取斗向私欲横領而已多、且組頭九左衛門儀兵右衛門弟にて年寄ニ有之候処、兵右衛門手代と名附、時々役席へ携役、權を好候間、役儀為勤候ハハ穩ニ可相成と存、去酉正月役入為致候処、都て兄弟馴合ニ付非道之取斗追々増長いたし、小前難渋仕詰、捨置候得は終に可及亡村は曆然ニ付、無奈儀右不正之嫌々乍恐左ニ箇条を以御訴訟奉申上候。

一、拾三ヶ年以前戌年中、当宿字猿橋懸替御普請被 仰付、仕立方之儀御普請役様方御附添宿方請負ニ被 仰付、右御普請中宿方惣代世話方として其節年寄にて相手九左衛門六人之もの立会、同九月、村内人足日々罷出、亥四月中皆出来相成、然ル処右御普請御入用金御下并遣払共兵右衛門一手取斗いたし、半途迄ハ村人足々手当いたし候得共、大半無手当にて遣払、尤御入用高三分通も其節御下金無之間、追て皆御下金有之次第仕揚勘定いたし惣小前へ割渡可申旨兵右衛門儀申聞、御普請中九ヶ月之間日々人足遣払に今御下金無趣にて拾ヶ年来其儘差置、且右御普請中隣村々々百石五拾人助合人足為差出遣払、先前より并当代相払候仕来にて右戌年通も人足手当可遣答之処、是亦無沙汰ニ罷在候也。依ては已来右橋御普請昔之前同様触当人足助合差出方難渋之箇候儀ニ御座候間旁以難捨置、御普請勘定突詰夫々割渡可申旨、追々及催促候処今以宥ト通御下金無之杯体能申居、当節ニ相成候ては兵右衛門存寄次第之儀ニ付勘定為見届候儀難相成旨高声手荒之談有之候得共、右御普請御入用御下知高にて損金相立候節は、宿方一統へ引請弁金可致答連印いたし候程之儀、清算可致は当然之儀、別て数日之間村方掛り切御普請手伝人足相勤候儀第一厚御仁恵ニ下置候御手当金遣い道不明之段歎々數奉存候間、御吟味被成下度段申立候。

一、相手方差上候は、去ル拾ヶ年巳前戌年中、当宿字猿橋懸替御普請地元受負ニ被仰付仕立中、村方人足掛り切ニ罷出居候処、半途迄は人足賃銀相渡候得共、右御普請御下金兵右衛門一手取斗にて村人足は無手当にて遣払候旨申立候得共、右御普請仕立方之儀は御普請役様御附添御嚴重之儀にて、名主兵右衛門、其節之組頭才助、年寄源右衛門、同九左衛門、小前にては百姓甚右衛門、喜三郎、清次郎、六右衛門都合八人世話方ニ相立諸般取斗方いたし、夫々手当差遣不申候て無差支出人足可有之道理無之、然ルヲ村人足ニ限御普請半途より無手当杯其外御入用高三分通御下金無之候間、追て皆下金有之次第仕揚勘定いたし可割渡旨申聞候杯、案外之儀にて、全体去ル亥年御普請皆出来之節諸向清勘定可取掛場合、道中日惣御改御出役被為在御座、地役人共手廻兼、無損差延罷在、其上下御普請世話方之内病氣其外差支之もの有之、為突合清勘定自然後れ候儀にて、且亦隣村々々百石五拾人助合人足先々より并当代相渡候仕来之申立候得

文久二（一八六〇）年から十年間にわたり争われた猿橋宿の村方騒動は、この史料にみるように、明治四（一八七二）年十二月、内済を以て落着した。ここには幕末期にもっていた諸矛盾が集中的にあらわれており、しかもそれが文久二（一八六〇）年六月の出訴以来明治までできたことは、その間同様の問題が存在しつつけたことになる。村内民主化を以て終了している点にも注目していただきたい（なお文中の千支の起点は文久二（一八六〇）年であることに注意されたい）。

猿橋懸替費用・人足問題
（嘉永三（一八五〇）年）

隣村へ助合人足さし出させる

相手方答弁

事故で清算がおくれただけ

共、右は御支配御役所近村々々高役人足御触当被成下候儀ニ付、先規橋掛替振合ニも弁当代等差出候儀曾て無之、全訴訟人共能書跡り候迄之儀ニ有之、一

弁当代は出さない

鉢右橋御入用御手当御下ヶ金にてハ諸色高直御普請仕揚遣私ニ引足兼、諸勘定突詰候節ハ足し金相立候儀を兼て世話方之もの共えも申聞、兵右衛門ハ勘定清算之儀、是迄度々及談候得共前奉申上候通世話方之もの病氣其外為突合区々にて決算相後候儀之処、勘定突詰之儀催促および候通、兵衛門高声手荒之談事有之杯無跡形偽り書綴申上候得共、勘定合之儀は素々兵右衛門一己之取斗ニ無之候間、早々突合決算いたし、巨細為見届候様可仕候間、彼等偽り申懸候始末、御吟味被成下度段申立候。

一、訴訟方にて申立候は、九ヶ年以前寅年中当村御高札懸所朽腐候ニ付、建替普

高札場改築問題(安政元年—一八五四年)

請いたし候趣一統え相触、入用として金廿五兩と寛小前高割いたし、同年二納御年貢と一同之取立、翌卯之年当郡立野村下畑組平兵衛立林買取、伐木角取いたし郷中え人足触当為持え建置候処、翌辰年前書高札場礎いたし候得共、右木品之儀、兵右衛門自分造作向其外え追々遣い払ひ、御高札場今以敷石而已にて普請可致体ニ無之、年来御高札不懸置、乍恐勸善懲惡之御趣意を以て御取締御渡被下置候大切之御高札ヲ、既ニ九ヶ年来廃し置、前文申上候通普請金取立買入候用材之分自己之造作ニ相用、大胆押領之所行、御吟味被成下度段申立候。

一、相手方答上候は、当宿御高札懸所、年来相立朽腐候ニ付、寅年中建替入用小

相手方答弁

前一統と相談之上金貳拾兩割付取立いたし、願人共申立之通木品買取、袖・木挽手間代、屋根板手間賃銀払、礎石工作料等夫々渡金いたし、材木屋根板等迄取運礎出来相成候事故、普請取懸り候心組にて其節当村ニ罷在候下谷坂本町大工吉五郎と申ものえ右普請渡方いたし、最早木口割振等いたし候折柄同人儀江戸表ハ親病氣之趣為知来立帰り候積を以出府いたし、其後同人出向方延引、其上屋根屋職人之内、上谷村用右衛門儀は既ニ手附金迄相渡置候処、去ル五ヶ年以前午年中病死旁御高札普請仕立方延引相成候儀ニ有之、然ル処右木品兵右衛門自分造作向其外え追々遣私普請可致体ニ無之杯取留儀申立候得共、右木品屋根板等迄聊散乱無之様置候儀にて、兵右衛門方自用ニ遣私候儀決て無之、御見分被成下候ハ眼前可相分儀ニ御座候間、全申懸之次第御吟味奉願上度段答上。

大工が江戸から来ている渡り職人であることに注意

屋根屋職人は上谷村の人

一、訴訟方にては、四ヶ年以前未年中、田畑川欠損地四拾石余奉願上御年貢御引方被 仰付候由之処、小前方荒地引方不相互、第一未年格別之損地出来候儀無之、其後暗き取斗ニ付、此段明細御吟味被成下度段訴上。

川欠損地問題(安政六年—一八五九年)

一、相手方答上候は、去ル未年七月中両度前代稀之大風雨、当郡村々田畑山崩川

相手方答弁

安政六(一八五九)年七月大

風雨

欠石砂入等夥鈍、私共村方之儀兩度御支配様御見分奉請、御高三拾石石式斗五升九合荒地相立候得共、麦作取入後之損地ニ付同年之儀は半高御年貢引方被仰付、翌申上去西兩年之儀は荒地高皆御引方相成候ニ付、御年貢取立方之儀は御割付目録進小前銘々持高え割賦取立上納仕候儀にて、毛頭私欲不正之取斗仕候儀無之、然ルを訴訟人共申立候は、四拾石余損地奉願上御年貢御引方被仰付候得共、小前方荒地引方不相互第一未年格別之損地出来候儀ニ無之後暗き取斗いたし候杯申立候得共、村役人自己之取斗とは事変、御支配御役職ハ御出役御見分被為在候儀にて、全損地無之場所荒地ニ可相互様無御産、余り不法之讒訴、此段御賢慮奉願上候、猶亦未年荒地半高御引方御沙汰以前御年貢勘定仕揚相成

引直し候ては夫々入狂出来候ニ付、其儘取立、尤半高御引相納候もの共えは御引方割合相渡御年貢請取帳え相記、御年貢并諸入用等不納入之分は清算致ものも有之候得共、右は正御年貢不納辻え見競候得は御引方之分にては引足不申詰り小前方も不相納分相寄候故願人共自分と等閑居今更体能御引方割渡し不仕候杯申立候段、甚以難得其意、前奉申上候進彼等同意之内にも夫々御引方割渡請取候もの齋然有之、第一惣代之七郎左衛門等は多分は御年貢違年不納乍罷在、右跡之儀惣代ニ相立候段不法之仕成と奉存候間、此段御賢慮被成下度願上候。且亦中西両年之儀は御引方御割附通小前持高え割付取立御上納仕候儀之処、是以御引方不相成、兵右衛門私欲罷在候杯不容易儀申懸、同人身分ニ拘候儀ニ付、兩年取立押切候御熟覽之上、御殿重御吟味被成下度段答上。

一、訴訟方申立候は、兵右衛門勤役中御年貢取立方ニ付品々訝敷儀御座候間、割賦取立共巨細見届方被仰付度段申立。
年貢とりたて方不正問題

一、相手方答上候は、御年貢取立方御割付御目録進小前銘々持高え割付取立上納仕候儀にて、其年々村内大小之百姓役宅え打寄都て取立巨細見届方為致候儀ニ付、彼は兵右衛門取斗向兼て心得乍罷在、意地悪敷所存疑惑探り迄之儀ヲ以年来帳面為見届候ては際限無之、尤何之年何の廉ニ不正有之哉的証を以申立候上は、為見届候様可仕旨答上。
相手方答弁
諸帳面を見せないこと

一、訴訟方申立候は、五ヶ年以前年年中暴瀉病流行いたし多人數相煩候ニ付、格別之以御仁恵翌年春中急夫食として御困糶拝借被仰付、拾式俵御下ヶ相成趣、右之内五俵は当村枝郷小倉幡野え貸渡、残七俵分兵右衛門儀村内利助え売渡代金私欲いたし候而已ならず、剩右糶返納之儀、翌申二納御年貢え組込軒別錢六百三拾文ソツ取立押領至極之始末御吟味被成下度段訴上。
コレヲ急夫食不正問題（安政六年）

一、相手方答上候は去来春中御困糶拾式俵拝借御下相成内、五俵は当村枝郷小倉幡野え貸渡、残七俵は宿内一同相談之上利助え代金五兩にて売渡、右金利助え相預置銘々病災危難遁候願果として氏神諏訪春日兩社え幟奉納いたし候手当ニ仕度申立ニ付、其節利助え預り金手形兵右衛門方え取置相預、右糶返納方之儀は宿内一統え割合買納仕候義ニ有之、然ル処去ル申年中村内番人小屋焼失にて、跡小屋補理方入用差支、百姓孫七、清七、綱藏、縫左衛門が利助方え一札差入、追て小屋懸入用取立候上之間、右金之内式匁小屋入用に遣払候儀ニ有之、残て利助方え預ケ金三兩之内にて糶付運駄賃其外入用錢四貫八百文相賄罷在候儀にて、訴訟人共始一同及相談取斗置候儀を、今更兵右衛門私欲罷在候杯案外之申懸ヶ、此段御吟味奉願上度段答上。
相手方答弁
病災危難遁れの幟奉納
番人小屋焼失事件

一、訴訟方ては、寺社領と唱村内大小之寺社夫々え畑地備置、小作人有之、右小作浮徳金年々寺社修復料に名主手許え積金ニいたし置、右金ヲ以修復いたし候古例仕来之処、兵右衛門儀近來寺社修復有之節は氏子一統え入用割懸取立前文年来之積金同人私欲いたし罷在候。御吟味被成下度段訴上。
寺社小作浮徳金不正使用間

一、相手方にては、寺社領修復備畑地小作金之儀、年々名主手元え預り置、大小之寺社修復いたし候仕来にて、去ル廿五ヶ年以前、成年大猿橋鎮守山王権現宮再建仕、其外当宿内拾式社之分、年々右金ヲ以大小破修復仕居候儀、尤氏神本社修復之節は入用高、氏子一統え割賦取立いたし候仕来ニ有之候処、何等之子細ヲ以年来之積金兵右衛門私欲罷在候趣申立候哉、余り不都合之申口ニ有之、
相手方答弁

氏神本社修復は氏子へ割賦

素より名主手許え預り置入用可遣私趣意之金子、兵右衛門手許え預り有之候逆私欲との申分難得其意、此段御吟味奉願上候。尤役儀交代之節は手許過不足取調役え引渡候仕来に御座候旨答上。

五ヶ堰費用高割り問題

一、訴訟方にては当村外四ヶ村組合御普請所堰之儀、惣高合千三百石余え定式金三拾兩割合出金いたし、小破之節は自普請いたし、大破之節は御普請願上入用御下金え右定式出金分を合し、不足仕候節は前文五ヶ村惣高え割付付金いたし候仕来に有之、然ル処四ヶ年以前未年中大風雨出水にて右堰流失いたし御普請被仰付候間、前文之遺足金割付、兵右衛門の触当通出金仕、其後組合村々承合候処、当村之儀は出金余分ニ付不審ニ存候処、尚去酉年同御普請入用之儀同様出錢いたし候処、同節は別て外村々割合余分取立ニ相成居、前申上候通五箇村一駄之高割、右体甲乙可有筋無之処当村分ニ限り右前条余斗之取立いたし、加之渡先えは陸々不相渡私欲罷在何共疑鈍、此段御吟味上被成下度段申立。

相手方答弁

一、相手方にては、五ヶ村組合御普請所堰之儀、三拾ヶ年以前迄は定式金三拾兩組合村々惣高割ニいたし、小破之節自普請、大破之節ハ御普請願上候仕来ニ相違無之候得共、其後右御普請所模様替相成、當時は小破之節は自普請懸り高を以組合村々高割ニいたし、大破之節は御普請願上御入用御下金にて、不足之分は是亦前同様割合取極ニ有之、然ル処去ル四ヶ年已前未年中右堰流失御普請足金之儀組合外四ヶ村振合、当村分へ余斗取立、尚去酉年迎も同様取斗私欲罷在候旨申立候得共、当村之儀は御普請井地流末にて、御場所井倉村九鬼大口迄之道法も手違、水揚人足時々往返之儀も手近村方之振合は人足数等相増候得は外村方割合とは甲乙有之候て正然之儀と奉存候。且御普請仕立方之儀は近來花咲村下組井上武右衛門養年々世話方ニ頼人足遣私等之儀は同人相弁居候儀ニ付、御札被成下候ハ、顯然可相分、猶亦渡先えは陸々不相渡世杯種々悪意申立候得共、假令少々渡不足之分有之候共其ものへ兵右衛門相對之儀にて、聊村方難儀ニ可拘筋無之、然ラ私欲との申立難心得、此段御吟味奉願上度段答上。

一、訴訟方にては当宿御伝馬勤兼候もの共々老人ニ付老ヶ年三分ツツ勤料として指出来、右之分は正人馬相勤候もの共え可割渡之処無其儀、兵右衛門問屋勤役中式拾九ヶ年分手元え取込私欲罷在、既に当正月中兵右衛門が逆訴仕候一件御調之上濟方之御差向去西老ヶ年分割渡相成候得共、其前廿八ヶ年分今以取込罷在候間、不残出金割賦割仕候様被仰付度段訴上。

伝馬勤錢不正使用問題 (文

久二年—一八六一年)

世話方は花咲村下組井上武右衛門

相手方答弁

一、相手方にては、御伝馬金勤残之分村内一同相談之上兵右衛門手許え相預り置候儀は相違無之、右は去ル廿八ヶ年以前未年中当宿年寄安太郎儀其以前江戸表え罷出居、御納戸御用相勤、其節同人儀当宿方え御納戸御反物取扱御用所傍示

御納戸御用

杭相立度段奉願上、右ニ付其筋の宿方故障有無御糺有之、右は傍示杭相立候ては難波之旨宿方惣代并宿役人共が奉願上候ても御聞濟不相成ニ付、無余儀石和御役所又は江戸御奉行所等え度々款願ニ罷出、式ヶ年之間宿方惣代并村役人共等所々宿詰罷在漸御款願之趣意相立一件落着は仕候得共、右用向九金四拾兩余兵右衛門手許一手立替ニ相成居候処、右入用村方が一時出金難波之旨にて、前書余分勤御伝馬請渡殘金之分ヲ以追々請取具候様申之、任其意取斗来候儀にて、尤右之内にて去ル天保九成年当宿前後え傍示杭相立、右入用金六兩余遣私

勤錢を立替分にくみいれる

其余は兵右衛門手元ニ有之候得共、同人手元立替之分え見競候ては未タ引足候儀無之、乍併訴訟人共疑惑有之候ては不宣候間年々差引殘之分取調為見届度段答上。

一、訴訟方にては、中馬と唱信甲駿三州を武相兩國に附通候馬役口錢之儀請負人

中馬口錢不正使用問題

有之、右請負金問屋方へ請取宿入用ニ遣払、余之分は小前一統に断之上遣ひ道相立、右不足之節ハ軒別ニ割附取立候仕来、且又隣宿村々馬士共当郡産物或ハ米穀塩其外宿内附通り候馬荷之分、地馬口錢と唱此分は給分なして問屋方へ請取来、然ル所兵右衛門勤役以来中馬荷之内ヲ勝手ニ地馬之趣申名付、自分へ取込候ニ付追々中馬口錢減少いたし、右請負高減し候間宿用雜費を引足不申右不足之分々取立候分不少、小前難渋仕、殊ニ右口錢之儀先年ハ宥正ニ付八文ツツ之処、廿ヶ年以来式文増拾文ツツ請取来、猶更近年馬荷出勞先年より多分ニ相成、依ては取上り高格別ニ可相増之処、右様問屋手元へ取込候分多く相成候故、却て減少仕候儀、眼前非分之取斗御賢察御吟味被成下度段訴上。

中馬口錢は十文

一、相手方答上候は、中馬口錢之儀は年々入札を以請負人取極、右之分宿入用并馬差給等々引当、不足之分ハ小前一統に割賦取立候仕来有之、口錢之儀は中馬地馬差別ニ不拘附送荷品ニ寄口錢請取来、此儀は当宿ニ限候儀ニ無之、拾六ヶ宿一体之儀にて外宿内御糺被成下候ても顯然相分候儀、聊非分之取斗仕候儀無御座、此段御賢察奉願上設旨答上。

相手方答弁

一、訴訟方申立候は、去ル天保十二丑年御年貢立替金ニ名付、郡中身元之ものより金子借請自用ニ遣払候段違御聰、於御奉行所御吟味之上御答被仰付候一件諸入用九金三拾兩余、弘化二巳年中小前一統に高割出金可致旨談有之ニ付、右は兵右衛門自用ニ借請候不正御吟味相成候儀にて、村方において出金可致筋無之、銘々難渋申之候処、權威押付之取斗を以強て取立候。飽迄不当之仕成御吟味被成下度段訴上。

貢立替金問題

一、相手方答上候は、去ル天保十二丑年御年貢立替金、郡中身元之ものも不納村

相手方答弁

村ニおいて然ル処、訴訟人共申立候通如何ニ風聞入御聰、右立替金借請候当郡村々御奉行所御召出御吟味御座候処、当村之儀は全小前方御年貢不納人有之、右立替金借請儀在候ニ付、其段奉申上候処追御吟味之上全小前不納有之ニ付御差構無之段被仰渡帰村被仰付候得共、右一件宿詰中諸入用之儀は金四拾兩余相懸り、右入用未進人而已に割賦取立候ては難渋ニ付、村方一同相談之上小前一統に割賦取立いたし候儀ニ相違無之。然ル処兵右衛門自用ニ借請候儀ニ候得共前書四拾兩余之諸入用如何様權威押付之取斗いたし候ても小前一統とて出金可致筋有之間鋪、此段御賢慮奉願上度答上。

兵右衛門に対する非難

一、訴訟方にては前書箇条ヲ以奉申上候通にて、一赫兵右衛門儀、生質奸智慾情深く驕慢増長いたし、其上剛氣甚敷私欲不正は勿論、平日非分押付之所置逸々難算尽、同人勤役中御年貢割賦其外都て諸帳面類見届申出候ても相手之もの共馴合一同ニ彼是申為見届候儀無之、就中兵右衛門儀及再応候得共役権弁舌ヲ以申威、夫錢書上帳等強談を以印形為致、殊更貯穀并百日夫食田穀取斗等何共疑敷、此上兵右衛門兄弟馴合不当相尋捨置候得は一村與隣ニ拘り、終ニは可及還転外無御座歎ヶ敷矣々難渋ニ迫り無余儀御訴訟奉申上候何卒格別之以御慈悲相手之もの共を召出前頭之始末御賢慮被成下逸々御吟味之上兵右衛門勤役中諸勘定見届被仰付銘々安堵御百姓永統相成候様被仰付度段訴上。

一、相手方にては前書ヶ条之外、兵右衛門奸智慾情深く驕慢剛氣甚敷非分押領之

兵右衛門の反論

所置逸々難算尽、組頭九左衛門と兄第合にて万事馴合、貯穀等百日夫食田穀取斗向等疑數捨置候へハ一村與隣拘り終ニは可及還転外無御座坏事大造ニ書綴リ

奉出訴以之外之儀、貯穀百日夫食之儀は年々右穀御見分御封印請大切ニ相守居候儀は当村而已ニ限らず郡中一様之趣意ニ有之、然ルヲ不容易支共書綴り被及出訴、兵右衛門身分ニ取取疎ニ相成、突々難忍既ニ願人之内七郎右衛門儀は勤役中天保九戌ノ去西迄廿六ヶ年間年貢未進之分金拾八兩三分錢貳百八拾文不納罷在、且差添人半右衛門儀も天保九戌ノ申迄廿三ヶ年之間御年貢未進之分金六兩七分毫朱ト錢貳百八拾貳文有之、右は御年貢筋可等閑置ニ無之候得共、平日間柄之もの故困窮ヲ勞、兵右衛門儀難滞ながら不納度々立替上納仕置候次第ニ御座候処、恩儀忘却不当至極難捨置候間、右当人とも年来御年貢未進之始末御吟味之上早々納方仕候様被仰聞度奉願上候。全体訴訟人共品々悪謀取巧村方惑乱為致候処、彼等自儘之取斗不相成故、今般不容易非難申懸候得共、兵右衛門において毛頭私欲不正之儀無御座候間、前条之趣意御賢慮之上御殿重御吟味被成下一村平穩ニ相治候様被仰付度段答上。

右一件御調中之処、左之名前之もの立入御猶予奉願上双方篤と承札候処、願人申立候大猿橋橋懸替并高札場建替及田畑損地御引方水難又は急夫食御貸下金中馬口錢其外口々之儀悉ク相混候故、自然前後之取斗も有之、疑念ヲ生し論立斯年来差違候次第ニ至候得共、今般立入人立会実意ニ取調及決算、不正之筋ハ無之段事柄相分、夫錢之内論中内渡取斗置候分は此度取引相済、其余論外之諸勘定向は追々逐実談決算いたし候積、且兵右衛門儀論中旁數年来引統役儀相勘居候儀ニ付問屋名主両役共今般退役、就てハ組頭百姓代とも一同退役いたし後役差定之儀は本村枝郷ニ不拘一村一体之入札とて、名主問屋之両役并組頭老人は本村之内、組頭或人は小倉幡野兩組え老人ツツ至当之人撰ヲ差定、以来旧弊改革一村和睦いたし候筈を以一同無申分熟談内済行届、偏ニ御威光と難有仕合ニ奉存候間何卒以御仁恤御調是迄ニて御免一件御下ヶ被成下度、然ル上は右一件に付重て双方御願筋無御座候。依之双方立入人一同連印御下ヶ奉願上候以上。

当御庁下

都留郡猿橋村

年寄

式拾四人惣代

小前

年寄

訴訟人 奈良七郎左衛門

年寄

東五郎病死ニ付

年寄

同 花田流三郎

小倉組

年寄

三拾人惣代

小前

年寄

同 小宮山義右衛門

同

小宮山義兵衛

名主・問屋退役

組頭・百姓代退役

一村一体の入札制度

猿橋村年寄

明治四未年十二月

小倉組年寄

幡野組

橋野組

年寄

拾九人惣代

小前

年寄

同 千見宗八㊦

年寄

同 定兵衛病死ニ付

同 千見与惣兵衛㊦

名主

相手 幡野兵右衛門㊦

組頭

相手 大野九左衛門㊦

百姓代

同 奈良吉右衛門㊦

小倉村

小倉村組頭(相手)

組頭

同 高木宗右衛門㊦

上谷村

上谷村名主(立入人)

名主

立入人 斉藤幸平㊦

玉川村

玉川村名主(同右)

名主

同 牛田八郎

下吉田村

下吉田村組頭(同右)

組頭

同 渡辺太四郎㊦

夏狩村

夏狩村年寄(同右)

年寄

同 志村三平㊦

郷宿

郷宿

原 正作

小沢啓太郎

谷村

御役所

明治五年猿橋村一件入用割合自得連印帳

一、不正出入一件入用懸り高総計

一、金千三百拾壹兩貳朱錢貳百八文

此割合

一、金七百八拾六兩貳分三朱 宿方出金之積

一、金三百四拾四兩貳分式朱錢五百文

枝郷小倉組出金之積

一、金貳百九兩三分錢三百六拾三文

同断幡野組出金之積

一、右は去ル文久二戌年より明治四未年迄不正出入一件、
入用懸掛り高書面之通割合出金可仕管今般右定候。
金子相違無之候。依之承知印形仕候以上

都留郡猿橋村

出入一件惣代

明治五年壬申九月

奈良七郎左衛門

右同断

花田与三郎

同断

奈良賀藏

同断

奈良甚右衛門印

同断

鈴木亦一郎

同断

森川伝藏

同断

矢桐小八

小倉組

出入一件惣代

小宮山義左衛門

小宮山義兵衛

杉本治右衛門

幡野組

出入一件惣代

千見宗八

同断

千見久四郎

同断

千見与惣兵衛印

同断

幡野久兵衛

前書之通我等立会割賦いたし候処相違無之候已上。

上谷村

原正作

二五九 知見芳文家文書六
八(猿橋町幡野)

この史料は、史料番号二四二であつてきたところの、文久二(一八六二)年から明治四(一八七二)年という、まる十年にわたつて争われた猿橋宿伝馬をめぐる大争議が終つた段階での、支出総計とその割りつけ方に関するものである。総計千三百十二兩という巨額な費用をかけて争わなければならぬほど、この問題は宿と助郷村にとって重大な問題であつた。

猿橋村出入一件惣代

小倉組出入一件惣代

幡野組出入一件惣代

原は郷宿の人間